

# 新入架史料

## 新入架原本・古写本類

### ○五大虚空藏法勤修事（元応三年）

（〇〇一四—一五）

辛酉革命の年に当たる元応三年（二月二十三日）に元亨元年と改元（一三二一）には、幕府によって鶴岡八幡宮で月ごとに攘災の密教修法が営まれた。本史料は、この正月の五大虚空藏法に関する記録で、大阿闍梨の永福寺別当前大僧正親玄の伴僧を勤めた親瑜によるもの。道場鋪設と修法次第、関連文書や先例などが写される。幕府最末期における祈禱僧の陣容や法会執行にかかる文書は貴重である。親玄は醍醐寺地蔵院主で座主も勤め、鎌倉に下つて幕府に重用されたが、本史料は、地蔵院を継承した道快（聖快）の至徳三年（一二八六）一見奥書がある親本を、その後継者と目されて入室していた聖通（聖円）のために写した聖教の一点で、応永二十三年（一四一六）賢政の書写。ただ地蔵院の正嫡は持円（將軍足利義持の叔父満詮の息）に譲られ、聖通も応永三十二年に没してしまい、末尾に持円の正長元年（一四二八）一見奥書があるように、地蔵院の重要聖教に繰り入れられたらしい。東寺宝菩提院旧蔵か。紙背文書（書状）あり。二〇二二年度購入。要修補。

一卷（全九紙） 二九・四×三五・八cm  
（藤原重雄）

### ○修史局以来残留書類目録

（〇一七〇—一八五）

表紙に「修史局以来残留書類目録 一応取調ヲ了シタルモノ」、背に「修史局以来残留書類目録」と墨書され、内題は「修史局以来残留書類」とのみ記されている。「史料編纂掛」原稿用紙を使用し、第一丁表に「東京帝国大学文学部史料編纂掛」方形朱印が押されているので、東京帝国大学の文科大が文学部となる大正八年（一九一九）から、史料編纂掛が史料編纂所と改称される昭和四年（一九二九）までの間に同掛の蔵書とされたものと思われる。また、表紙にはアラビア数字「27」のスタンプを押ししたラベルも見られ

るが、貼付された時期は未詳である。

内容は、太政官正院修史局以来編纂されてきた「復古記」と「征西始末」の原稿や編纂材料などのうち、明治二年（一八八八）内閣から帝国大学への事業移管に伴い、帝国大学に移送された残留書類の目録である。まず、①「編纂官ノ一覽ヲ経存置ニ決セシモノ」として「復古記原稿 二箱」以下の書類、②「取調ヲ了シ未タ編纂官ノ一覽ヲ経ザルモノ」として頭書「一番」の「越前藩紀事材料 一」以下の書類、③「征西始末編輯用書類 未タ編纂官ノ一覽ヲ経ザルモノ」として頭書「第一函」の「電報録 一一」以下の書類について、書名・数量などの目録情報が記される。引き続き、④「以下史料編纂官補田沼駒江調」として、「総裁局記」／「行政官叢書」／「行政官記録」／「弁事局記録」／「内国事務局記」／「内国事務局叢書（内容ハ弁事局叢書ト略同ジ）」／「太政官書類」／「弁事局書類」／「行政官書類」／「無題名書類 年月日ナシ」／「無題名書類（弁事局叢書ノ内カ）」／「留守官書類」／「留守官書類（続キ）」／「軍務官書類」／「弁事局叢書」／「無題名（弁事局叢書ノ内カ）」／（題名なし）「第一号」〜「第五号朱印類」、さらに「大正三年調 第二長持」として、（題名なし）「第六号」〜「第式拾参号」／「太政官書類」／「行政官書類」／「神祇官書類」／「弁事局書類」／「留守官書類」／「宮内省書類」／「刑法官書類」／「軍務官書類」／「無題名 弁事局叢書ノ内カ」／「無題名」／「民政官 民政部書類」／「一、総督府 一、議政官 一、会計官 一、兵部省 一、大蔵省 一、外国官」といった書類の目録情報が記されている。

ここに名前が見えている田沼駒江は、『東京大学史料編纂所史料集』（東京大学史料編纂所、二〇〇一年）によると、明治八年（一八七五）太政官正院修史局の四級写字生を初出として、同局の三級写字生、太政官修史館の二級写字生・二等繕写・八等掌記・七等掌記、内閣臨時修史局の掌記を経て、明治二十一年（一八八八）帝国大学臨時編年史編纂掛の元修史局掌記残務取扱

を務めていた。翌年以降はその名が見えなくなり、帝国大学文科大學史誌編纂掛の時代も在職は確認できないが、明治二十九年（一八九六）帝国大学文科大學史料編纂掛の史料編纂助員となっており、これ以後、書記（明治三十一年（一八九八））同三十七年（一九〇四）・史料編纂官補（明治三十八年（一九〇五））大正一〇年（一九二一）・史料編纂官（大正一一年（一九二二））を歴任し、大正一二年（一九二三）から同一四年（一九二五）までは史料編纂補助嘱託・史料編纂業務嘱託を務めている。

したがって、本史料の内容は、「以下史料編纂官補田沼駒江調」や「大正三年調 第二長持」の記載などにより、明治二十一年（一八八八）帝国大学への事業移管以降、田沼が史料編纂官補であった明治三十八年（一九〇五）から大正一〇年（一九二一）までの間に実施された調査、年次が判明している大正三年（一九一四）の調査などに基づいて作成されたものと考えられる。

なお、本史料は、これまで近世史料部門維新史料室の常置本であった。元所員の宮地正人氏が、同室在籍時にこれを利用して分類・整理した史料群が特殊蒐書「復古記原史料」である（宮地正人「復古記」原史料の基礎的研究）『東京大学史料編纂所研究紀要』第一号、一九九一年。

一冊（二一六丁） 二四・八×一七・一cm  
（箱石 大）

○延文五年桂宮院伝法灌頂私記

延文五年（一三六〇）十月に、広隆寺の子院桂宮院において執り行われた密教儀礼に関わる記録。計六通の紙背文書があり、同年十一月の仁木義長没落（延文五年の政変）に関する貴重な情報を含んでいる。購入時は卷子装だったが、現在は修理を行い、一紙ごとに保存している。詳細は堀川康史・三輪眞嗣「延文五年桂宮院伝法灌頂私記・同紙背文書」（『東京大学史料編纂所研究紀要』三二号、二〇二二年）を参照されたい。二〇一七年購入。

一一通（二六・四×二〇・四cm、二六・五×二九・三cm、二六・五×七・七cm、二六・六×三八・三cm、二六・六×二九・九cm、二七・一×三八・二cm、二七・一×二六・二cm、二七・〇×三九・一cm、二八・三×二三・二cm、二八・一×三九・五cm、二八・四×九・

六cm、二八・三×三九・六cm）

（堀川康史）

○孔雀経・後七日御修法等文書

醍醐寺地蔵院旧蔵とみられる、主に修法関係の古文書等全一二点。二〇一八年度購入、二〇二〇年度に主要なものを修補、また応急手当済。

(一) 藏人所孔雀経御修法用途奉送状

建暦元年（一一二一）七月十三日。早天により、醍醐寺の成賢に祈雨の孔雀経法を修させた際に、藏人所より送付した香薬・道具等の目録。藏人所発給文書の原本で、宿紙の標本としても貴重。修補済。

続紙（二紙） 三三・六×一〇二・四cm  
(二) 孔雀経御修法巻数案

建保六年（一一二八）正月二十一日。同十三日からの修明門院御祈の孔雀経法の巻数で、同時期の案文。

縦紙（二紙） 三二・八×五七・一cm  
(三) 孔雀経・仁王経御修法供米等注文（後欠）

表紙外題「孔仁兩大法并普通法・炎魔天供等用途支配（慶延）」とあり、本紙第一紙のみの残闕。冒頭に「孔雀経・仁王経御修法一七箇日供米御明等事」と標題があり、本文は後欠。表紙見返しに「前大僧正（定海）之時注文也」とあり、『醍醐雜事記』の編者である慶延が収集・類聚した記録類の一部ならん。本紙紙背に請文の書きさしあり。修補済。

続紙（二紙） 二九・一×五三・二cm  
(四) 後七日御修法真言院指図写

建久三年（一一九二）正月の後七日御修法（金剛界）の真言院指図。同十七日、勤修寺成宝の記で、観応二年（一三五二）義宝写を享徳四年（一四五五）宗耀が転写。大阿闍梨は覚洞院勝賢で、裏書に同年の請状を写す。

続紙（二紙） 二八・七×八六・六cm  
(五) 後七日御修法記 天治二年

天治二年（一一二五）正月の後七日御修法（胎蔵界）の記録。勝覚が大阿闍梨を初めて勤めた。紙面が擦れて後代のなぞり書きが多い。

続紙(二紙) 二四・八×八五・八cm

(六) 後七日御修法請僧交名

至徳二年(二三八五) 正月の後七日御修法(胎藏界)の交名・記録。交名に続けて、「裏書」として八日の記録を写す。「東寺百合文書」ふ函四号二三の写し。

続紙(二紙) 二八・一×七七・二cm

(七) 真言院後七日御修法伴僧請書案

長承二年(一一三三) 十二月日。翌年正月の後七日御修法への覚誉に対する請状の写し。大阿闍梨は定海。紙背は仮名書状。

堅紙(一紙) 二九・〇×五〇・一cm

(八) 真言院後七日作法(法務御房日記)

後七日御修法の真言院・御前の作法に関する覚書。寛信ならん。紙背は仮名書状。

堅紙(一紙) 二九・一×四九・六cm

(九) 御持僧請文案

書式の雛形。御持僧に関する覚を付す。

堅紙(一紙) 二七・五×四八・四cm

(一〇) 真言院後七日作法(法務御房日記)・護持僧請文案

(八) および(九)の文書雛形の二点を写す。紙背は仮名書状。

堅紙(一紙) 三一・〇×五四・三cm

(一一) 遍智院僧正御入壇記

文治元年(一一八五)十一月二十五日、勝賢から成賢への伝法灌頂の記録。端裏下方に「地藏院」とあり。

堅紙(一紙) 三二・二×四二・〇cm

(一二) 阿闍梨真源請文

寛永十九年(一六四二)六月五日。同七月二日の中和院十三回忌結縁灌頂への召請に応じる請文。裏打あり、奥裏追筆「寛延二(一七四九)四月十日修復之了、承照」とあり。

堅紙(一紙) 三一・〇×四二・一cm

(藤原重雄)

### 新入架特殊蒐書

○原平三関係史料

(原平三関係史料)

原(旧姓山崎)平三は、明治四十一年(一九〇八)四月三十日に長野県上田市で生まれ、昭和四年(一九二九)四月に東京帝国大学文学部国史学科に入学した。昭和八年(一九三三)三月に同大学を卒業すると四月に文部省維新史料編纂事務局嘱託となり、昭和十三年(一九三八)八月に維新史料編纂官補、昭和十六年(一九四一)三月維新史料編纂官となった。原は昭和十九年(一九四四)六月に東京九段の東京第三部隊に応召入隊し、昭和二十年(一九四五)四月にフィリピンミンダナオ島ダバオにおいて戦死した。

本史料群は平成二十九年(二〇一七)に原平三の長女小見壽氏から寄贈された。史料群の内容は凡そ二分類され、①原平三が生前に執筆した論文の原稿と、論文を執筆するため蒐集した筆写史料。②原が生前に発表した論文をまとめて、小見壽氏が中心になり『幕末洋学史の研究』(平成四年(一九九二)、新人物往来社。平成十三年(二〇〇一)復刻版、私家版)、『天誅組拳兵始末考』(平成二十三年(二〇一一)、新人物往来社)、『原平三追悼文集』(平成四年(一九九二)、私家版)が刊行され、これらの書籍を刊行するために再度蒐集された原の複写論文や新たに依頼した解題等の原稿、刊行に協力した児玉幸多、小西四郎等の研究者とのやり取りの書簡等から成っている。

原の研究テーマ「幕末洋学史の研究」は、具体的に維新前後の学問関係を中心にした蘭学発達史から蕃書調所の創設、さらに蕃書調所に所属していた市川兼恭や同所の科学と技術部門に関する研究、洋学移入の経路として幕府の英国留學生の派遣や露国留學生等に着眼した研究などで構成されている。

これらの原の研究テーマから本史料群の特徴をあげると、文久二年(一八六二)蕃書調所に出仕し、パリやウィーンなどで開催された万国博覽会に参加した田中芳男(一八三八〜一九一六)の明治三年の日記(二冊分、原の筆写)がある。東京大学総合図書館は『摺拾帖』を始め田中芳男文庫として多くの資料を所蔵(昭和六年(一九三一)寄贈)しているが、博物館の祖ともいわれる田中芳男の日記はこれまで存在しないと考えられていた。明治三年と限定された時期のものではあるが田中芳男の具体的動向を知ることができ

る史料である。

また、江戸幕府は慶応二年（一八六六）に一四名の留学生をイギリスに派遣した。留学生には後の東京帝国大学総長になる菊池大麓（当時は箕作大六、一二歳）もいたが、留学生のなかの一人であった伊東昌之助（岡保養）の慶応三・四年の英国滞在日記も原は筆写しており、慶応二年の英国留学生の動向を知ることができる貴重な史料である。

また、史学史としては、東京帝国大学文学部国史学科の教授で史料編纂所の所長も務めていた辻善之助の講義ノート「国史概説」二冊も所蔵されている。これらのノートは原の同級生でもあり文部省維新史料編纂事務局の同僚でもあった福山精義（二六歳没）が筆写したノートであり、辻善之助の国史学科での具体的な講義内容を知る上でも貴重な史料である。

なお、本史料群のうち書簡や名簿で住所等が現在でも特定できずともものは閲覧不可になっていることをご了承ください。

七二二点

（生駒哲郎）

○平田国学者医師大武秀斎関係文書（平田国学者医師大武秀斎関係文書）

本史料の寄贈者は大武秀斎の子息大武和三郎の孫にあたる弁護士大武和夫氏、二〇一九年及び二〇二一年の受け入れである。

大武秀斎は岡崎の名社で徳川家康の誕生の折には産土神として拝礼された六所神社の出身、本人は漢方医となり本姓大竹を変え、六所神社は兄弟の大竹氏が継ぐことになった。秀斎は漢方医となって旗本の侍医を勤めながら、平田国学に傾倒、気吹舎門人となって、入手した政治情報を気吹舎にもたらず主要な人物の一人でもあった。また同人は詳細に風説その他を記録しつつ、その部分が史料編纂所寄贈史料の主体をなしている。但し六所神社は江戸期二六〇石の朱印地をいただく名社でありながら、維新の際は徳川家に由緒のある神社だったためか、新政府からは冷遇された如く、秀斎自身は明治期は教派神道一派禊教の幹部として布教に尽力する。

大武和夫氏にひきつがれてきた史料の大半は明治期の禊教関係史料であり、この部分に関しては大武和夫氏は国学院大学に寄贈した。また国学院大

学に寄贈された史料の中には当然のことながら大武秀斎家族関係史料も含まれている。秀斎の三男が明治五年生れの和三郎、彼はブラジル移民の始まる相当以前の二八九〇年、ブラジルにわたってポルトガル語を修得、一八九四年に帰国するが、日本・ブラジル間に国交が成立した一八九七年、日本に設けられたブラジル公使館に一九四二年の閉鎖まで勤務、その間一九一八年には「葡和辞典」を、一九二五年には「和葡辞典」を独力で編纂し、日本人ブラジル移民事業上の貴重な道具をつくり出した。この大武和三郎に関する史料も国学院大学へ寄贈された分の中に含まれている。

三三三三

（宮地正人）

新入架写真帳

○日本史料「京都府」仁和寺史料 御経蔵

○古文書「京都府」新日吉神宮・藤島家文書